

ヒネ豚が生じないための飼養管理

「ヒネ豚」を豚のせいにしていませんか？ ヒネ豚の発生率は事故率とも連動していると思いますが、「もともと弱いからヒネ豚になる」のではなく、「なぜこの豚はヒネ豚になったのか」を考えてみることで、事故豚、ヒネ豚を出さない管理に結びつくことと考えます。

伊藤 貢 (有)あかばね動物クリニック

1 ヒネ豚を育ててみる

2.2kgの離乳子豚、皆さんならどのように対応しますか。普通は淘汰対象ですね。私も同様の指示を出します。理由は、その子豚が病気の源となり、群全体の病気のレベルを上げるからです。また、このような豚は、腸管の絨毛(エネルギーを吸収する部分)が縮小し吸収面積が少なくなっているため、食べたものの吸収率が著しく落ち、大きくなりません。『石豚』になって、そのまま成長が止まります。

と、筆者は考えておりました。今から紹介する内容は、獣医師になってまだ2年足らずの若い女性のスタッフが、どうなるだろうかという興味で、ヒネ豚を家に持ち帰り、一緒に生活した記録です。

名前を『むうー』と名付け、彼女との共同生活が始まりました。体重2.2kg、生年月日は不明ですが、約1ヶ月齢です。家につれてこられた『むうー』は、一緒に生活するにはお風呂に入りました。とても気持ちよさそうに入っています(写真1)。豚舎のなかではヒネ豚でしたが、洗って汚れを落とすと、そこそこ見られる豚になりました。ヒネ豚の外観は、被毛が粗剛で、汚れていて、痩せています。そのため、貧弱に見えますが、風呂で体を洗えば、ただの小さい豚で、とてもヒネ豚には見えませんでした。

翌日、ドレスアップして出勤です。とてもかわいい子豚に変身しました(写真2)。翌日100g増えました。3日目には、環境にもだいたい慣れてきて2.5kgまで増えました。1ヶ月で1kgしか増えなかった子豚が、2日間で300gも増えたのです。

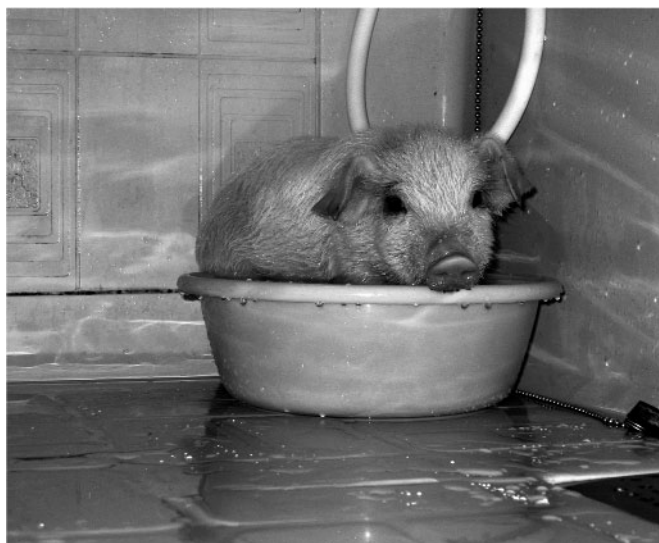


写真1 共同生活1日目



写真2 共同生活2日目

これはかなりの変化で、このままのように成長するか楽しみです。一緒に生活していると採食パターンがよく分かるもので、1時、3時、5時と、細かく少しずつ食べているようです。HAROLD W.GONYOUによれば、「食事は1回10分、成長とともにその回数は減少する。25kgでは120分で、80kgになれば、その3分の1近くまで食事に費やす時間が減少する。しかし、これに反比例して1回の摂食量は増加する」ということで、この子豚の場合は、哺乳中と同じ状態なので恐らくさらに食べている時間は長くなると思います。

7日目に3kgを超えました。1日100g以上の増体です。まさに会心の出来事です。11日目には4kgを超えました。やはり、食べたいだけ食べ、自由気ままな生活は、人も豚も肥らせませす。そのまま大きくなって、1月18日に2.2kgだった豚が2月2日には6kgに達しました(写真3)。15日間で3.8kg増えたのです(図1)。哺乳中は1ヶ月で1kgしか増体しなかったのと同じ豚が、です。



写真3 2.2kgから6.0kgに成長

筆者は、ヒネ豚は一生ヒネ豚だと思っていました。この報告を見る限り、この考えは間違っていました。豚は、何も好き好んで今の環境に住んでいるのではなく、仕方なく給与された飼料を食べ、豚舎に住んでいるのです。すべては我々人間の管理の結果であることを改めて強く感じました。

2 PRRSの感染と離乳体重

最近、PRRSウイルスの遺伝子解析データが発表されるようになってきました。また、検査機関でも遺伝子分析を行い始め、少しずつ、PRRSウイルスの正体が明らかにされてきました。これに加え、ウイルス量も検査できるようになり、PRRS感染の実態が明らかにされてきています。

これから紹介するのは、離乳時の状態がPRRS陰性で、その後PRRSウイルスに感染し、発育にどのように作用するか追跡調査したものです。

離乳後に分娩舎から離乳舎に移動したあと1ヶ月間、毎週体重測定と採血を実施しました。そのあとは1ヶ月ごとに同様の調査を出荷まで続けます。1群が1ペン36頭で調査開始しました。現在90日目に入りましたが、いまだに1頭だけが、PRRSウイルスの感染を免れています。ウイルス量の測定は京都府立大学と栄養病理研究所に依頼し、リアルタイムPCRという手法を使いました。

図2は調査開始後の日数と体重の増加を示したものです。群の体重の最大、最小、平均を示し、さらに調査開始後7日目にPRRSウイルスが確認された個体を1st-PRRSとし、14日目にPRRSウイルスが確認された個体を2nd-PRRSとしました。さらに60日経ってもPRRSウイルスが確認できなかった個体をnon-PRRSとしました。36頭中、移動後7日目にPRRSウイルスが確認できた個体は2頭、14日目も2頭、ほ

図1 ヒネ豚むうーの体重の推移

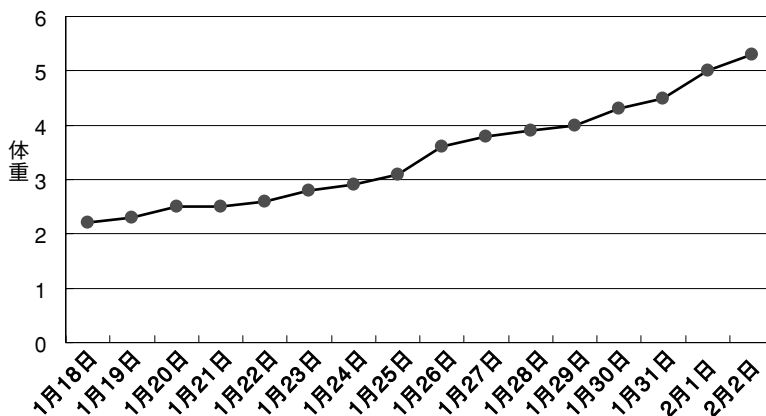


図2 PRRSウイルス感染の時期と体重の関係

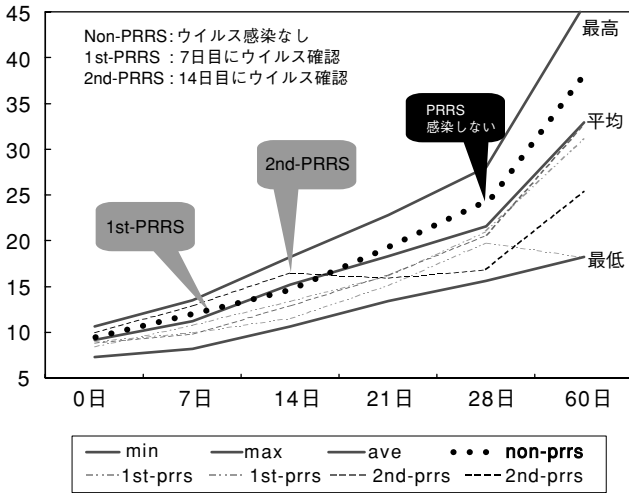
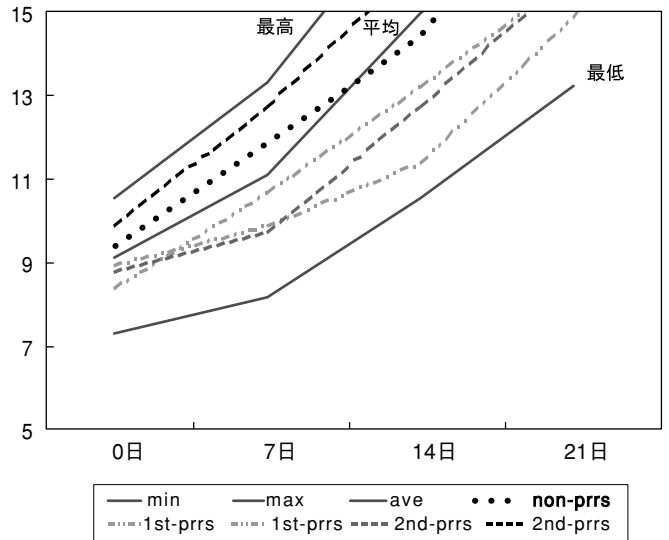


図3 図2のグラフの拡大



とんどの個体は60日までにPRRSに感染しましたが、1頭だけが感染しませんでした。以上の5頭を抽出して、体重の推移と、群の体重増加のなかでの、5頭の推移を示しました。図3は、調査開始時の体重が分かるよう部分的に拡大したものです。

これを見ると、早い時期にPRRSウイルスに感染する個体は、平均体重以下であることが分かります。また、早めに感染した個体は、その後も平均体重以下でした。やはり、ウイルスが侵入した時期は状態を悪くし、食欲が落ち体重の伸びが悪くなります。この影響は、遅く感染するほど弱いことも分かりました。今回の調査は、PRRSウイルスだけに限って調査していますが、野外であるため、別の要因も考えられます。しかし、体重とウイルス量との関連性が強いことから、離乳時における体重の確保はPRRSの対策上重要であると考えられます。

3 ヒネ豚の要因は、管理、環境、病気

ヒネ豚をどれだけ少なくできるかは、冒頭にも紹介しましたが、人がどれだけ手を掛けることができるかにかかってきます。豚は、好きでヒネ豚になったわけではありません。すべては、「ここに住め、これを食べる」と管理者に従っているだけです。それなのに、ヒネ豚になれば「お前が悪い」と言わんばかりに、豚のせいになります。言い訳を自分ではなく、豚にもっていきます。

群のなかで負けているような豚が、免疫力の弱さとストレスにより、病気を持ち込んでしまう源になります。PRRSウ

イルスの侵入と体重の変化の部分でも述べましたが、弱いものから病気を拾い、それが全体の病気の元になる、こんな構図がヒネ豚をつくっていると思います。

4 ヒネ豚になったあとの対応

ヒネ豚が群で負けた結果であることから、群編成は大きな要因です。筆者はヒネ豚をつくらないように、分娩舎で他の群と混ぜることを勧めています。早い人は生後7日以降から、間仕切りを取りはずして別の腹の子豚が行き来できるような形にしています。

また、ヒネ豚になってしまった場合は、やはり群でいじめられるため、気づいた時点で早めに群から分けて別飼養にします。これを実施するタイミングは、各農場の技術のレベルによりますので、各自で判断してください。判断の目安としては「別飼養にした豚が出荷できるかどうか」です。どのくらいの時期がくれば別飼養にした豚が出荷できるかを、自分で見つけてください。

別飼養する場所ですが、病豚の集まりであることを大前提に、場所を設定してください。場所が見つからない場合は、豚房の四方を他豚房の豚と接触できないように板で仕切ってください。豚舎と豚舎の間に放牧する人もいます。色々工夫してみてください。

ヒネ豚は、人が作り出した豚です。生まれたときからヒネ豚ではないはずですが。もう一度、そこにいる豚がもし自分だったらどうなのか、豚を自分に置き換えて考えてください。病気の言い訳はそのあとからにしましょう。